



Nagoya City University Academic Repository

学位の種類	博士（人間文化）
報告番号	甲第1447号
学位記番号	第20号
氏名	野田 いおり
授与年月日	平成26年3月25日
学位論文の題名	『ボヴァリー夫人』におけるジェンダー構造の考察 A Consideration of Gender Structure in Madam Bovary
論文審査担当者	主査： 山本 明代 副査： 土屋 勝彦， 田中 敬子， 村田 京子

博士論文審査及び最終試験結果報告書

2014年 2月 5日

審査委員(主査) 山本 明代

名古屋市立大学大学院学則第14条及び名古屋市立大学学位規程第10条に基づき、次のように博士学位論文審査及び最終試験結果を報告します。

- 1 審査委員の補職及び氏名
別紙1のとおり
- 2 審査に係る学位授与申請者及び論文の表題
別紙1のとおり
- 3 学位論文の内容の要旨
- 4 学位論文審査の要旨
別紙2のとおり
- 5 最終試験の結果の要旨又は学力確認の結果の要旨
別紙2のとおり
- 6 学位授与についての意見
別紙2のとおり

(別紙1)

1 審査委員の補職及び氏名

委員区分	補 職 名	氏 名
主査	教授	山本 明代
副査	教授	土屋 勝彦
副査	教授	田中 敬子
副査	大阪府立大学・教授	村田 京子

* 人間文化研究科教員でない場合は、補職名欄は所属・補職名

2 審査に係る学位授与申請者及び論文の表題

申 請 者	学籍番号	104804
	氏 名	野田いおり
	指導教員	山本 明代
	副指導教員	土屋 勝彦
申請に係る 学位論文の表題	『ボヴァリー夫人』におけるジェンダー構造の 考察 A Consideration of Gender Structure in <i>Madam Bovary</i>	

(別紙2)

3 学位論文の内容の要旨

本研究はフェミニズム批評の中でも、とくに「ジェンダー」という概念を用いた文学研究の一実践である。考察の対象として、リアリズム文学の祖とも称され、19世紀のフランス文学を代表する作家ギュスターヴ・フロベールの傑作、『ボヴァリー夫人』を取り上げた。

研究の目的は、「作品」、「作家」、「テキスト」という三つの対象にジェンダー的なアプローチを行い、重層的なジェンダー意識の影響関係を考察するとともに、『ボヴァリー夫人』という文学作品を体系的に捉えなおすことである。考察の方法として、同作品の二項対立のジェンダー構造を提示し、それらが「脱構築」にいたるプロセスの解明を行った。

論文の構成は第Ⅰ部から第Ⅴ部までの五部構成である。第Ⅰ部ではセックスとジェンダー、男と女という二項対立からの「逸脱」、第Ⅱ部では、公共圏から親密圏への「流入」、第Ⅲ部では、語りに見られる積極性と保守性の「反転・逸脱」、第Ⅳ部では、男女の性役割の「逆転」、そして第Ⅴ部では、二項対立の背景にある「共通性」という各々5つのテーマを設定し、それらに対してジェンダー的分析視角で論を展開した。

まず、第Ⅰ部では、「セックス」と「ジェンダー」という二項対立からの「逸脱」をテーマに、フロベールの生い立ちや現存する書簡を手掛かりに、フロベールの性格の特徴、女性観やジェンダー意識を明らかにした。フロベールの性格の特徴は、一つの事柄に対して肯定と否定という二律背反的な価値づけをすることである。そして、二項対立のどちらか一方を選択するのではなく、相反性を付与したまま受け入れるスタンスを取っている。このような二項対立の構造がフロベールの精神性の基盤となっている。

また、フロベールの女性観やジェンダー意識は、女性全般に対しても、恋人に対しても、肯定と否定、畏敬と嫌悪、尊敬と侮蔑など、アンビバレントな両義的スタンスが見られるのが特徴である。当時の多くの男性たちが、恋人や妻という私的領域に属する女性に対してでさえも、公共的価値規範によって、類型化した女性像を要求していたことを考えると、フロベールのように、女性に両義的な価値づけをすることとは、男・女という枠組みにとらわれない「個人」という観念の形成の萌芽や、当時の男・女の社会規範構造から「逸脱」した前衛的なジェンダー意識をみることができる。

次に、第Ⅱ部では、公共圏から親密圏への「流入」をテーマに、公共圏と親密圏という「場」における二項対立の構造について分析を行った。公共性の圏域における男性優位のジェンダー規範は、教育を通じてエンマの内面に影響を与えている。当時の女子教育には、保守性と積極性の相反する両義性が見られる。両義的価値を持った女子教育によって、無意識のうちに保守的な価値意識を養ったエンマが、実生活においては積極的に自己了解を求める姿は、

保守性と積極性が混在した形であり、女子教育の持つ二項対立構造に組み込まれず、そこから逸脱しようとするものである。

また、公共圏と親密圏をむすぶ媒体（メディア）としての読書にも着目した。七月王政の読書は、「自己実現」、「個人の楽しみ」といった親密圏の充足をはかる側面がありつつ、一方では「読書をする」という行為そのものが男性優位の公共的規範性を補完するというアンビバレントな二面性を持っている。

第Ⅱ部では、公共圏と親密圏、保守性と積極性、従順と反抗などの二項対立のジェンダー構造を明らかにしたが、これらの関係性は常に対立構造を示すわけではない。時には「流入」し、融合して、二項対立の枠組みを解体する。『ボヴァリー夫人』は、公共圏と親密圏という「場」の流入、融合によってもたらされた一義的ではないジェンダー構造を背景とし、積極的な「生」を希求して、そのジェンダー構造の枠組みから逸脱しようとした一人の女の物語であると言えるだろう。

第Ⅲ部では、二項対立構造の「反転・逸脱」をテーマに、「語り」に見られるジェンダー性を明らかにした。まず、男性の視線にさらされるヒロインと、その身体の語られ方について分析した。男たちは、エンマに対し、性規範と好色、理想と通俗（現実）、貞淑と不貞、憧れと畏怖といった二項対立構造による身勝手な視線を送り続けてエンマの身体を拘束する。エンマはこのような二項対立構造の視線による閉塞感から逃れようと葛藤し、七月王政期の社会通念や男性優位の視線の拘束からの解放に挑戦して、脱構築化を求めた。

また、男性たちに「見られる客体」であるエンマの身体を彩る色彩の「青」が、どのような意味を付与されているのかについて、登場人物の視点や視線を通してジェンダー的アプローチを行った。男たちの視線を受容し、「語られる」客体であるエンマが、自らの身体に付与された二項対立の意味づけを「反転」させ、その構造の中に組み込まれることなく、自由な意志で規範から逸脱すると、恋人の愛情が失われ、不幸になり、最終的には死に追いやられるというストーリーは、保守的で、規範性の強い、男性優位社会における女性の自由の限界を示すものである。

第Ⅳ部では、男女の性役割の「逆転」をテーマに、エンマの「男性化」、シャルルの「女性化」のプロセスを通して、登場人物のジェンダー的自己了解の変化を分析した。「男性化」という現象は、男性優位のジェンダー規範を無意識的に受容し、無意識的に抑圧された女性が、自己否定をすることによって、支配的ジェンダーへと自分を変身させていく過程である。それは自己解放された姿ではなく、ジェンダー的抑圧に屈している姿ともいえる。この複雑な二重構造は、当時の社会が抱えるジェンダー間の問題の複雑さを示している。

また、シャルルの性役割が男性から女性へと越境し、脱男性化、「女性化」するプロセスにも焦点を当てた。「男らしさ」という男性規範はシャルルが望むものではない。シャルルの脱

男性は、公共圏における自己否定であり、親密圏における自己肯定と考えられる。「男」と「女」という二項対立の構造の枠組みから逸脱し、エンマとシャルルは自らの幸せの形を追い求めた。その結果、シャルルは女性化し、エンマは男性化する。『ボヴァリー夫人』は、自らの性の二項対立の構造を越境し、「逆転」させた男女のすれ違いが引き起こした苦悩と葛藤の物語である。

最後に、第V部では、二項対立の背景にある「共通性」というテーマで、『医師の妻』と『女の一生』を取り上げ、『ボヴァリー夫人』との比較を行った。『医師の妻』に関しては、イギリスとフランス、男性作家と女性作家がもたらす二項対立の構造はあるものの、両作品に共通するのは女性の閉塞感である。両作品を比較した結果、当時のジェンダー規範が抱える共通の問題が浮き彫りになった。

さらに、『ボヴァリー夫人』と『女の一生』を比較してみると、両作品は、人間の宿命的な悲しい生の営みを描くという主題を共通に持っている。たとえ主人公の性格の内面が異なり、それぞれの事象に対するスタンスが異なっても、生きることの悲しみ、苦悩は共通のものである。エンマのように積極的に生きても、ジャンヌのように社会規範に従って保守的に生きても幸せになれない二人の姿は、当時の女性たち共通に共通する生きる苦しみと葛藤を代弁しており、女性たちの幸せの限界を表している。

以上のような考察を通して、全体の結論を示すと、以下の通りである。フロベールのアンビバレントな女性観やジェンダー意識は、女子教育、読書、表象、視線、身体の意味において、男性性／女性性、公共圏／親密圏、自己／他者、規範／自由、意識／無意識、発話／沈黙などの二項対立として、テキストのいたるところで網の目のようなストラテジーを張り巡らしている。このような二項対立構造は、七月王政期の社会的特徴である男性優位のジェンダー規範とエンマの苦悩・葛藤の関係性にも影響を及ぼしている。エンマの苦しみはこの二項対立の枠組みに位置づけられることであり、一方でその枠組みに留まりたいと願うジレンマである。このジレンマが登場人物のジェンダー性の「揺らぎ」という現象を引き起こし、その背景にある二項対立構造は、融合、流入、逆転、錯綜を引き起こし、脱構築をするのである。

本論文では、『ボヴァリー夫人』をジェンダーという視点で分析し、二項対立の構造を見いだした上で、その枠組みを解体するという試みを行った。保守的な男性優位の社会において、積極的に生きることを諦めなかったエンマの姿は、新たな生き方を模索した「新しい女」の萌芽であり、規範を逸脱しても自らの幸せを肯定し続けたシャルルの姿は、男・女というジェンダー的枠組みを脱構築するものである。人間が生を営む社会を描いた『ボヴァリー夫人』という文学作品は、アイロニーと風刺に満ちて、その時代に生きた人々の心象世界を詳細に描き出し、感情を付与された歴史的資料として、その時代を鮮明に映し出している。

4 学位論文審査の要旨

本論文は、19世紀のフランス文学を代表するフロベールの『ボヴァリー夫人』を取り上げ、作品に内在するジェンダー構造を論じたものである。研究の方法として、社会的・文化的性差であるジェンダー理論に加え、二項対立的なセックスとジェンダーの関係性を再検討する脱構築理論を用いた。さらに、作家論、作品論、テキスト研究、比較研究という多面的なアプローチを駆使して、この課題を解明している。

作家フロベールを考察したのは第一部である。ここではフロベールの生涯と女性との関係、この作品の着想を得た背景などを検討したうえで、フロベールの女性観とジェンダー観について書簡を用いて検討した。その結果、自らの階級を肯定し、かつ否定する心的構造とパラレルな形で、フロベールがジェンダー・ニュートラルな女性観を有していることが明らかにされた。

この作品を同時代の社会背景に位置付けて検討した作品論は、第二部で展開されている。ここでは、七月王政期の女子教育と読書に注目し、当時の公共圏と親密圏における女性の存在をふまえ、主人公エンマの価値意識と行為を分析した。エンマの価値意識に影響を与えた女子教育と読書には、規範の強化・補完という保守性ととも、新たな知識・価値観の習得という積極性を育む両義的な要素があった。この二項対立的な構図の中で、エンマの選択には、公共圏における保守性、親密圏における保守性と自律性という「揺らぎ」があり、それが破滅へと導いたことを示した。

テキスト研究は、「語り」にみられるジェンダー意識を考察した第三部と越境する性を分析した第四部で行った。「語り」に関しては、男性たちの視線が捉えたエンマの身体と青の色彩イメージに現れた二項対立構造を各要素の関連性の中で考察した。その結果エンマには、妻・天使対欲望という男性の二項対立的な視線からの逸脱とともに、父権制ブルジョワ社会の中での自分の立ち位置について、自由・幸福というプラスの価値付けと、拘束・嫌悪というマイナスの価値付けの間で反転が起こっていたことが明らかになり、保守的で規範性の強い男性優位社会における女性の自由の限界が示された。また、この作品の中ではエンマの男性化とシャルルの女性化という性の越境が起こっていることをテキスト分析によって論証し、それはジェンダーロールという二項対立の逆転と逸脱を意味したと論じた。

第五部では、イギリスの女性作家ブラッドンの『医師の妻』とモーパッサンの『女の一生』を取り上げて、各々の作品との比較研究を行った。同時代のブラッドンの作品との比較では、作家の性差、作品の性格の違い、読者の想定という相違点があるものの、主人公である女性の閉塞感が表現されている点では共通していたと述べている。また、モーパッサンの作品に関しては、そこに登場する2人の女性とエンマとを比較したうえで、男性のジェンダー観に

位置づけられることを拒否し、自己実現を希求したエンマの姿に、後の時代に出現する「新しい女」の萌芽をみることができると主張した。

最後に「おわりに」において、各部と各章で論じた内容について、『ボヴァリー夫人』にみられる二項対立と脱構築の全体図」にまとめ、この作品のジェンダー構造を示した。そして、七月王政期の社会の保守的な性規範の中で主人公エンマは、ジェンダーの二項対立的な枠組みの中で苦悩しつつも、その枠組みに留まらざるを得ないジレンマを抱えており、そこにジェンダー性の「揺らぎ」があったと結論付けた。

本論文の独創性について

野田氏の研究の独創性は、第一にフロベールの『ボヴァリー夫人』をジェンダーの観点から分析し、その構造を明らかにした点である。ジェンダー理論による文学研究は英米圏を中心に発展してきたが、フランスや日本ではまだ端緒についたばかりである。フロベールの『ボヴァリー夫人』に関しては、バルガス・リヨサヤルネ・ジラルが身体論の観点からジェンダー的考察を行っているが、作品全体のジェンダー構造の解明には至っていない。日本では、工藤庸子が2013年に出版した著書の中でフロベールの女性観、『ボヴァリー夫人』における登場人物の男女の役割の越境性、公共圏と親密圏の関係性について論じているが、工藤は近代ヨーロッパにおける宗教観の解明に主眼をおいているため、詳細なテキスト分析に基づくジェンダー関係を示してはいない。

第二の独創性は、本論文がテキスト研究に加え、作家論、作品論、他の作家の作品との比較研究を行い、総合的に課題を考察した点である。『ボヴァリー夫人』研究に関しては、とりわけ、フランスにおいても、日本においてもテキスト研究が最も重要な位置を占めてきた。テキスト研究は生成の理論、物語の理論、フィクションの理論によって深められ、記号論やナラティブ分析などの新たな方法論を取り入れて進展している。各々の研究手法が特化している中、野田氏は、作品のジェンダー構造を解明するために、テキスト研究に加えて、作家論、作品論にも取り組み、より体系的な研究を試みた。

第三の独創性は、各部の中で明らかになったジェンダー関係を図式化したうえで、作品全体のジェンダー構造を図にまとめ、各概念の関係性を論理的に説明づけた点が挙げられる。これによって、研究の方法である二項対立と脱構築の理論を用いて解明されたこの作品のジェンダー関係を明確に示すことができた。

本論文の問題点と今後の課題

本論文の問題点としては、2点挙げられる。第一に、本論文では『ボヴァリー夫人』のテキストとして、ブッキング・インターナショナル社版（*Madame Bovary*, Booking Internationa, Paris, 1993）を使用しているが、最も定評があるガリマール書店で刊行され

たプレイアド版(Gustave Flaubert, *Madame Bovary*, Œuvres complètes de Bibliothèque de la Pléiade Gallimard.) を使用すべきであった。本論文の第3章、第4章、第5章、第6章の内容はすでに本研究科の紀要や『比較文化研究』（日本比較文化学会）で発表した論文を書き直したものであるが、これらの論文ではプレイアド版を使用したことが記されている。本論文全体もプレイアド版を使用し、それを明記すべきであった。

第二に、欧米、とくにフランスで発表されたフロベールや『ボヴァリー夫人』研究に関する近年の研究をほとんど使用しなかった点である。日本だけでなく、欧米の最新の研究成果を批評し、本論文の課題を位置付ける作業が不足していた。ジェンダー論に基づくフロベール研究や『ボヴァリー夫人』研究でなかったとしても、最新の研究動向を検討する必要があった。

今後は、上述した問題点に取り組み、最終試験において審査委員から指摘された内容に関する指摘をさらに考察することによって、本研究をより洗練・進展させることができるだろう。

5 最終試験の結果の要旨又は学力確認の結果の要旨

4名の審査委員は本論文を精読・審査し、2014年1月30日（木）、午後1時より約1時間半、野田氏に対して公開で最終口述試験を行った。審査委員4名以外に、本研究科教員と大学院生の計5名が出席した。最初、野田氏により40分間、博士論文の課題、方法、構成、要旨、第四部の内容に関して、レジュメと資料に基づき、説明があった。その後質疑応答に入り、審査委員からの質問に対し、野田氏は誠実に答え、自説の補強を行った。村田教授は、三人の男性をめぐる青のイメージの考察と、『医師の妻』との比較研究のオリジナル性を高く評価したうえで、男性化の定義が各部分で揺らいでいる点を指摘した。そして、エンマの男性化とフロベールの恋人ルイーズに求めた男性化とは同じ特徴のものであるのかと尋ねた。野田氏は、同時代の価値意識から免れていないフロベールのジェンダー観がエンマに投影されているが、そこには多少のずれがある。エンマ自身にも男性的な側面とともに女性として愛されたいという揺らぎがあったことを指摘した。次に村田教授は、セックスとジェンダーの関係を二項対立的に捉えると、精神的・知性的な男性と、官能的・身体的な女性という対比になるが、フロベールも同様な考えであったのかと質問した。野田氏は、フロベールはその対比でこの作品を描いたが、女性に対して敬意を持っており、女性が身体的に自然にふるまうことを評価していたと答えた。さらに村田教授による七月王政期のフランスの女子教育とバルザックの『田舎ミュージック』との比較に関する質問があった。野田氏は、中産階級の女性でも未亡人となると、自立を強いられる場合があり、ほかにも自立の手段がまったくなか

ったわけではなかったと答えた。『田舎ミューズ』に関しては、比較の対象として当初検討をしたものの、本論文の趣旨が「可能性としての女」であったため採用しなかったと答えた。さらに、村田教授から女性の自立と関連して「読書」だけではなく、自らの考えを言葉で表わす「書く女」に対するフロベールの考えを問われたが、野田氏はそれに関しては、今後の課題としたいと答えた。

土屋教授は本論文が論理的に分析・叙述されていることを評価したうえで、図式化し整理できない問題があることを指摘した。そして、男性作家が女性を主人公とした場合、男性性をおのずと投影してしまうことがあるが、他方、作家は自らの分身として登場人物を描くとは限らず、読み手にまかされている部分もあるのではないかとコメントを述べた。そして、土屋教授は、フロベールは誰を読者として想定して、どんなイメージを伝えようとしたのか、本論文で論じた点まで、フロベールは意識していなかったのではないかと尋ねた。野田氏は、フロベールが当初からこの作品で主人公の女性の不倫と死を描くことを構想していたこと、遺作としてこの作品に自らを投影しようとしていたと説明した。さらに、フロベールは、主人公に不倫をさせて社会規範から逸脱させただけでなく、自死を選択させることによって宗教規範からも逸脱させ、主人公の死を解放として表現した。それに対して、フロベールは自らがブルジョワ社会から逸脱し、芸術世界で生きる選択と覚悟を重ね合わせていたと答えた。土屋教授の時代性についての質問に対しては、野田氏は、フロベールが時代性よりもテキストを重視し、同時代の読者よりもより普遍的なものを目指してこの作品を著したと説明した。

田中教授からは、セックスとジェンダーの二項対立の分析に関して、この構図をそのまま使って考察している個所と二項対立の逸脱を指摘している個所があり、分析に一貫性がなく、混乱しているのではないかと指摘があった。野田氏は、論文の展開上、まず二項対立の図式を作ってから、脱構築を行ったが、二項対立の図式も実際表現されていたと答えた。次に田中教授は、フロベールがエンマをどの程度新しい女として描いたのか、意識的だったのか、あるいは執筆の過程で変化したのかと尋ねた。野田氏は、作家が気づかなかった意図まで、現代人は読み取ることができる点があると答えた。最後に田中教授は、シャルルの女性化とシャルルの惨めな死にはいかなる意味があったのか、シャルルの死と比較することによって、エンマの死もより明確になるのではないかと尋ねた。野田氏は、シャルルの女性化は自分の正直な気持ちが投影されたものであり、シャルルの死については、シャルルの登場で始まる物語であるため、その死で終わるのは必然的な展開であったこと、シャルルの死は惨めさばかりでなく、ファミ・ファタル（運命の女）であるエンマのあとを追った前向きな死の側面もあると説明した。

その他の出席者からは、引用箇所が日本語になっているが、原文を使って考察しているのか、日本語のイメージから考察すると本来の意味から外れてしまう点があるのではないかと

いう質問と自由間接話法について尋ねる質問が出された。野田氏は、引用文についてはフランス語の原文からフロベールの意図を考察して、他の翻訳書を参考にしながら、自ら訳したこと、自由間接話法については、事例を挙げて説明した。

6 学位授与についての意見

各審査委員が本論文を慎重に精読・審査し、口述試験を行った結果、野田いおり氏の論文はフロベールの『ボヴァリー夫人』のジェンダー構造を作家の女性観、当時の社会背景、テクストの詳細な分析によって考察し、独自の見解を提出したものとして認められる。論理性に優れている反面、構図にあてはまらない要素を捉えきれていないという問題があるが、新たな『ボヴァリー夫人』論を示した研究として、審査委員は一致して申請者に博士（人間文化）の学位を授与するのにふさわしいと判断する。